

番号	名称	解説	年代
	<b>Ⅳ 性質の判別</b>	このセクションでは、和書を資料として用いる際に注意すべき、版種や奥書の判別などについて解説します。	
	<b>(1) 古活字本と整版本</b>	江戸初期は、活字版印刷から整版印刷への移行期で、同じ著作が両方の形で出版されることもあり、古活字本を覆刻した整版本もしばしば刊行されました。ここでは、両者の判別の方法について解説します。	
	<b>匡郭のあるもの</b>	古活字本の匡郭は、上下左右の線を組み合わせて作るため、隅にしばしば隙間が生じます。匡郭のある版本では、匡郭の隅に隙間があるかどうかで、古活字本か整版本かを見当づけができます。	
	<b>匡郭のないもの</b>	古活字本の活字は一つ一つ高さが微妙に異なり、しばしば墨付きの濃淡が様でないことから、匡郭のない版本では、墨付きの様相が古活字本か整版本かの判別の拠り所の一つとされます。しかし古活字本と認定するのにより確実な方法は、欠損活字の使用を確かめることでしょう。また、摩滅の度合の異なる文字の混在も、有力な目安になります。	
	<b>古活字覆刻整版本</b>	江戸初期には、古活字本を覆刻した整版本がしばしば作られました。一見すると元の古活字本と酷似していますが、連続文字のあり方などが整版本であることを示しています。	
	<b>(2) 奥書と刊記の問題</b>	和書において、写本の奥書と版本の刊記は、その本の素性・製作年代・製作環境などを知る上で重要なものです。しかし、奥書はその性質について判別が必要であり、また刊記は必ずしもあるとは限りません。ここでは、それらの問題について解説します。	
	<b>本奥書と書写奥書</b>	奥書のうち、書写に用いた本（底本・親本）にあったものを本奥書、その本の書写に当たって書かれたものを書写奥書と言います。	
	<b>本奥書</b>	既存の写本を転写して新しい写本が作られる際、底本（親本）の奥書を転記することが多い。和書では底本のことを「本」と言うので、底本にあった奥書の意味で本奥書と言う。本奥書は「本云」という注記を冠することが多くあり、また署名の下に「判（在判）」とあれば本奥書と認定できる。	
	<b>書写奥書</b>	本奥書に対し、当該の写本が書写された際に書かれた奥書を、書写奥書と言う。本奥書は必ずしも「本云」と注記されないの、注記のない奥書は、本奥書か書写奥書かの判別が必要である。	
	<b>奥書の真偽</b>	奥書は写本の素性や書写の事情等に関して重要な情報を提供するものですが、時として権威づけなどのために、偽の奥書が創作されることがあります。	
	<b>偽奥書</b>	権威づけや年代の偽装などの目的から、架空の奥書が書かれることも稀ではない。創作された奥書は、人物と年代の矛盾などから、捏造であることが判明する場合もある。	
	<b>真偽不明の奥書</b>	捏造の疑いがあっても、容易に判定できない奥書もある。特に具体的な人物名のない奥書は判断が難しい。	
	<b>書写奥書・刊記のない本</b>	写本には書写奥書のないものも少なくなく、版本も江戸初期頃までは刊記のないことが珍しくありません。書写奥書や刊記のない本をどう位置付けるか、資料として扱う場合の課題になります。	
	<b>書写奥書のない本</b>	写本が作られる際は必ず書写奥書が書かれるわけではなく、書写奥書のない写本も少なくない。その場合は、年代を墨色・書風・料紙・装訂・表紙などから総合的に判断しなければならない。	
	<b>無刊記本</b>	江戸中期以降の版本は、私家版などを除き通常刊記を持つが、特に江戸初期頃までは、刊記のない版本も珍しくない。その場合は、開版年代・出版の事情や環境などを、字様・料紙その他から推定する必要がある。	